



## “リスク・マネジメントについて”

小椋総合コンサルタント（株）

糸田川 廣志

上下水道部門及び総合技術監理部門

2021年は、2020年と同じく都市部においては、“コロナ禍”の緊急事態宣言、まん延防止措置の中で過ごす毎日であった。夏以降は、全国に感染大爆発になった。

後手後手をとおり越して、ミスミスの連続でその要因の一つで出発点は、やはり『GoTo』キャンペーンであったと思っている。オリパラが終わり、経緯から改めての実感である。

それは、『リスク・マネジメント』が皆無というか、無視したものといえるものであった。

元々『GoTo』キャンペーンはコロナ収束後における経済活動支援であったはずである。

しかし、世界で異常な事態が発生しているパンデミックを超過小評価したのか、SARS及びMERSの日本での軽さに慢心したのか、全く“リスク・マネジメント”が機能しなかったというのが現実と私は感じている。科学を軽視、無視した“あおり”感染拡大結果である。

もう一つの実感は、我が国の舵取りをする人達に“リスク・マネジメント”をできる人材は極少との私の感覚は、幻覚ではないと確信めいたことである。2年近く結果を見せつけられると、21世紀に入り技術が軽視され続ける実情を再認識できた事象である。

### 【 技術士にはマネジメントが求められる 】

技術士には総合技術監理部門があり、約24,000人の合格者がいて、私もその一人である。

総合技術監理部門を受験し合格する若手も増えている。ITを駆使しての総合技術監理を実践し、効率や有効性の即効を求められる現状が若手に受験意欲を高めていると感じる。

また最近の技術士第二次試験は、技術士にマネジメントを求める試験内容と聞いている。

国際感覚としては、当然と私は感じている。技術士を世の要請に基づき多く誕生してきた近年であるが、その人材を有効に活用する意思はあまり感じられない。

技術士は国の宝のはずだが、蔵の中に放置状態といえる。

21世紀に入り20年が経過しようとしているが、いわゆる“新自由主義”がもてはやされてきたこの間、科学や技術が尊重され重視されてきたという実感をほとんど持っていない。

近年は、異常気象を起因として豪雨災害や線状降水帯による異常連続多降雨を要因とする土石流や洪水氾濫が毎年のごとく発生している。それらに応えるために技術士はこの間、通常よりも多くの合格者を生み出してきたと考えていたが、このコロナ禍の中、その活用には大いなる疑問が生じてきた。コロナ禍2年でその疑問はさらに大きくなっている。

大学支援で学生へのプレゼンテーションに行くと、近年の災害続きに若者達は災害復旧や復興に貢献したいと考える人達が増えていると聞く。その意欲に対して、我々技術士は必ずや応えるべきと考える。しかるに、これら若者、技術士を取得した若者達を国として活用し、彼らの意欲と期待に応えようとしているようには、私には感じられないのが現状である。

その昔、本省の官僚は、技術者を大切にしてきたと思っている。  
また、多くの都市で技術助役がいて、技術の調整や技術の発展に寄与してきたと思う。  
しかし現状では、技術副市長や技術副町長はほとんどいないように感じている。

難しい国家資格を取得させて活用しないのは人財の放置状態で、国民の生命財産を守る使命をないがしろにしていると思われるも仕方ないとの感じである。

技術士法は確かに「資格法」でしかないが、試験は難しく、国民の生命財産に直接的に関わる事も多面的にあり、とりわけ技術士の約半数を占める建設部門の技術士は、多方面において重要な位置を占めている。土木技術士の王道と私は感じている。

我々の時代は現在とは社会的背景は違うが、高度成長時代の真只中で、技術レベルも現在に比べて情報共有が劣っていたため、全般的レベルは及ばなかったと思われる。

しかし、国民の生命財産を守る使命感やその意思を継承し育てる人材育成は、我々に脈々と引き継がれてきたと思う。その状況下でリスク管理も育ってきたと思われる。

私自身も学園紛争の渦中で卒業したが、若き時代に友人達、同級生達と様々に議論してきたことが社会人となり仕事をする中で社会の中で、また先輩諸氏から教えられた使命感を引き継ぎ自分の中で構築してきたと思っている。

幸運にも私は、大学卒業時に先輩であり恩師より、卒業後に一緒にコンサルタントに就職して修業し、恩師が独立時には共にすることを約束して社会人となった。

その結果、3年目には恩師の独立に伴い自身も起業に加わった。

その後は、会社の成長に伴い、技術組織の構築、人材の育成、会社の基盤づくりに全力を尽くすことで歩んできた。その中で、リスク・マネジメントは日常仕事であり、自身の人生確立でもあったと思う。総合技術監理部門創設時に受験し合格したが、一緒に受験した部下は難しかったといったが、論文問題は日頃の体験から問題なく記述できたが、5問択一が私にはきつかった記憶が残っている。

リスク・マネジメントは日常の業務の中に潜んでおり、適正な業務遂行がそれらを養うものとする。その意識を日常的に維持することが大事であることは明らかである。

【 技術士を資格のみに終わらせるのはもったいない！ 】

技術士は、医師、弁護士等の業法資格ではなく、簡単に言えば「技術国家資格」である。しかし、コンサルタント業の登録には欠かせない資格で、建設業界においては極めて重要な士法資格である。コンサルタント業は技術士不在では設立できない。

一方、近年の技術士資格に対する評価や実社会での活用について、残念な軽視状態と感じている。それが、若い人達の中に中途半端に浸透しているのではないかと危惧している。

果たして若い人達は資格を活かしているのか、疑問を感じている。

私は、科学技術庁が最後に実施した技術士試験で合格し、登録は科学技術庁に自ら出向いで登録した。昭和 58 年度登録で、昭和 59 年(1984 年)1 月である。

合格後の歩みは、35 歳後半での合格のため、実務と管理と両輪のリスク・マネジメントが日常業務であった。若くまあ張り切っていたので、無理もできた時代であった。

私が技術士に合格した当時、上司からも他の先輩技術士からもよく言われたのは、技術士は出発点でしかないとの言葉で、到達点のない技術士街道を歩めと言われたように感じた。

それは今も同じである。技術もリスク・マネジメントもエンドレスかも知れない。

近年、技術士に合格した人達が群れないことに対して、これは世の流れなのだろうか、それとも技術士の価値観の低下なのか、不明なままで継続中である。ホモ・サピエンスの血を忘れてはいないだろうか？技術士合格で到達点になっているのかも知れないと感じるのは、単なる思い過ごしであってほしいと願っている。

技術士会に属しない大学技術士会にも属しないが、登録して技術士は名乗っているとは聞くので、私には摩訶不思議な現象である。

私は(公社)日本技術士会に登録後すぐ入会し、今なお会員を継続中である。会員としては四国本部に属し、徳島県技術士会にも属して継続 35 年の表彰も受けた。当然大学技術士会にも属している。これらは到達点へ向かう過程で、“技術士街道”一つの過程である。技術士の血となり肉となる要素と考えている。

会社のみでは得られない大きなエネルギー源である。

まあ、そんなことを言えば老兵の戯言と思われてしまいそうでもある。

しかし、若い技術士達には次の時代へ向かう人材育成や技術士ネットワークで社会貢献してほしいものである。学生達が近年の災害から救いたいと社会貢献したいと意思を示していることに対して、社会の中で、少しでも応えてほしいと願うばかりである。

我々の工学は経験工学であり、これらの資格に対する考えや志向も経験工学の中の一つであるのかも知れない。そう考えると、気は楽になるような気がする。

## 【 最近、感じたこと 】

コロナ禍が少し収まりつつある中、楽観的な判断の誤りはしてほしくない。

この2年のコロナ禍で、ホモ・サピエンスとしての歴史が大きく壊されていたと考えている。密となり、語り合い、助け合ってきた歴史を壊されて、リモートとか自宅で仕事、自粛で人と人がふれあい助け合うことが厳禁された。ここにコロナ禍で生活苦が重なり、自殺者が増え、精神不安定者が増えていると思われる。

ある紙上で、コロナ禍で不登校となった生徒の話を読んだが、ホモ・サピエンスのDNAを破壊された2年であったかもしれないと感じた。

世界中で混乱が拡大されていると感じているが、とりわけアメリカの力の減退、世界の憲兵を捨てようとする自国主義などは、世界を不安の中に落ち込ませていると感じている。

コロナ禍で、それはホモ・サピエンス機能を失うかの如く進んでいるように感じている。

片や対立軸の国々も、世界を安心させる方向へは向かわず、不安を拡大させる傾向にあり、世界中がホモ・サピエンス機能から離れている感じがする。

ホモ・サピエンスは公助的共助的精神と思っているが、今やそこが崩壊しつつあるように感じている。

20万年ほどのホモ・サピエンスの歴史が、コロナ禍で崩壊させるのは実に先行きが怖い感じがする。

ホモ・サピエンスらしくコロナ禍を克服したいと考えている。

そこには、まさしく“リスク・マネジメント”を確実に活かして克服していきたいと考えている。その模範に我々技術士はなるべきと考える。

もっと集まって、話し合っ、意思疎通をし、無感情から感情ある意志ある人間としての価値を高めたいと思っている。リモートでは意思はほとんど伝わらないとの実感である。

リモートでは、労働対価や知的対価は評価できないと思われる。

技術士としての価値観を上げるためにも、リスク・マネジメントを厳格に守りながら新しいステージを創っていこうと思う。